

図書館だより

わたしの推し本

(表紙・図書委員が作成した推し本の解説ポスター)



『すてきな出会いを求めて』

ラーニングセンター散策の楽しみ

高校教頭・国語科教諭 早川公敏

ちよつとした空き時間ができた時に、ラーセンを散策するのが好きだ。もちろん目当ての本があつて、その続きを読みに行ったり、借り出しに行ったりするのもいいけれど、ぶらぶらと歩き回りながら、目についた本を気まぐれに手に取ってみたり、内容を勝手に想像したりするのも楽しい。

そんな時、アピールが圧倒的に強力なのは、やはり面陳列された本たちだ。「面陳列」とは本の表紙が見えるように、ラックなどに立てかけて目の高さぐらいに並べる方法で、背表紙だけを見せて書架に立てていく「背差し」や、表紙を見せてはいるものの目線を下げなければならぬ「平積み」などと比べると、場所を食う代わりに訴える力は強い。そして当然のことながら、面陳列される本は選ばれた本＝面白い本なのである。

「本との出会いが人生を変えた」的なエピソードは枚挙に遑(いとま)がない。実業家・渋沢栄一における『論語』然り、空手家・大山倍達における『宮本武蔵』然りである。だけどなにも、人生観にコペルニクス的転回をもたらしうな大仰なものばかりが「良い読書」ではない。理屈抜きに楽しめるものや、

「へえ」「ほう」と感心して、友だちや家族に話したくなるようなものは、十分生活の向上に資するものであり、ひいては豊かな人生につながる。

職員室を出て階段を降り、中学昇降口側からラーセンに入る。とたんに面陳列された魅力的な本たちが目に飛び込んでくる。



(成田高等学校図書館・ラーニングセンター)

『生成』の論点 学問・ビジネスから

カルチャーまで『喜連川優 青弓社』

……ジェミもチャピも、ググの代用にしかしてないんじゃないかなんて思うな。

『なぜ鬼は虎皮のパンツをはくのか 仏教のヨコ道ウラ話』石井公成 法蔵館

……仏教がらみのよもやま話は「へえ」「ほう」の宝庫！

『僕たちの愛した昭和カルチャー回顧録』

土田晃之 双葉社

……思春期が終わるまで昭和を生きた私にはどストライク。絶対面白いやつ

『わたしは銭湯ペンキ絵師』田中みずき 秀明大学出版社

……昔の銭湯には必ず手書きの富士山があったよな。

『もしもコピー機にネクタイが巻き込まれたら』ジョシュア・ペイビン デビッド・ボーゲニクト 文響社

……表紙からしてすでに大変なことになっている。どうするの、これ？

(ちなみに私は右記の本をまだ一冊も読んでいません！)

ホール側一列の面陳列を眺めただけでこの調子である。ラーセン全体には、いったいどれほどの面白い本があるのだろう。どれほど自分の人生を豊かにしてくれるのだろう。考えるだけでワクワクするではないか。さあ、すてきな本と出会いに、ラーセンを訪ねよう。

『国際子ども図書館を訪ねて』

図書委員会 副委員長 五十嵐友映

私たちは四月二日に、東京都台東区にある「国際子ども図書館」に行きました。国際子ども図書館とは、国立の児童書専門図書館で、本の収集、交流、文化に親しむ場を提供する施設です。

建物はレンガ棟とアーチ棟で分かれていて、レンガ棟は明治三十九年（一九〇六年）に建てられました。ルネサンス様式の洋館で、東京都の歴史的建造物に選ばれています。アーチ棟は、平成二十七年（二〇一五年）に建てら



(国際子ども図書館)

れました。全体がカーブを描いている、最新の様式の建物です。

この取材を受けて、たくさんの方を知ることができました。



(開き扉のプレート)

例えば、レンガ棟の三階の大階段と二、三階の廊下の間には、厚いケヤキ材の扉がありました。両側から開けることができ、現在のドアノブ式ではなく、プッシュ式の扉でした。当時は引き戸が一般的で、開き扉が珍しかったため、「おす登(と)あく」と書かれたプレートがありました。また、レンガ棟二階の児童書ギャラリーでは、明治時代に使われていた本を運ぶためのエレベーターがありました。その頃は、特別閲覧室として使われていた部屋で、書庫から資料を運搬するために使用されていました。どちらもとても興味深かったです。

私たちはこの取材を通して、図書館の歴史や当時の文化について、さらに知識を深めることができました。また、図書館がしている子ども本の本に関わる活動や調査研究について知ることができました。私たちのこれからの図書委員の活動に活かしていきたいです。

『図解入門よくわかる』

半導体の動作原理

著者 西久保靖彦 発行 秀和システム

石田絃人



皆さんはスマートフォンやワイヤレスイヤホンなどに使われている半導体を知っていますか。使われているこ

とは分かっていますが、それがどのようなものなのかを知っている人は少ないんじゃないかと思っています。

半導体は、電気をよく流す導体とほとんど流さない絶縁体の中間的な性質をもつ材料であり、代表的なものにシリコンがあります。シリコンは規則正しい結晶構造を持ち、電子はエネルギーバンドと呼ばれる領域に存在しています。何を言っているのかかわからないと思いますが、まあ簡単に言えば電子が存在できるエネルギー空間のことをエネルギーバンドと呼んでいるのです。このエネルギーバンドがどこまでつまっているのかによってその物質が導体なのか、絶縁体なのか、はたまた半導体なのかが決まります。

ね？面白くなってきたでしょう？

純粋なシリコン（真性半導体）は常温では自由電子が少なく電気を流しにくいですが、

不純物を加えるドーピングという作業によって性質を大きく変えることができます。リンを加えると自由電子が増えるn型半導体となり、ホウ素を加えると電子の抜けた穴である正孔が増えるp型半導体となります。正孔は正の電荷を持つ粒子のように振る舞い、電子とは逆方向に移動して電流を担います。またややこしくなってきましたね。つまり、シリコンにマイナスの性質をもつ不純物を混ぜると電子が余った状態になり、n型半導体ができ、シリコンにプラスの性質をもつ不純物を混ぜると正孔が余った状態になり、p型半導体ができます。

n型半導体とp型半導体を接合したpn接合では、半導体の「特定の条件で電気を流すことができる」という性質を見ることができ、pn接合に電源をプラス側にp型を、マイナス側にn型を繋ぐと電子が移動するので電流が流れます。逆に電源を繋ぐと電子が移動することができず、電流も流れなくなります。これが半導体の持つ性質です。

この性質はダイオードに利用され、電源回路などで重要な役割を果たしています。さらにトランジスタでは、わずかな電流や電圧で大きな電流を制御でき、信号の増幅や高速なスイッチングが可能となっています。特にMOSFETと呼ばれる構造は集積回路の基本素子として広く用いられ、コンピュータやスマートフォンなどに不可欠な存在となっ

ています。このように半導体は電流を精密に制御できる材料であり、情報の処理・記憶・通信を支える現代社会の基盤技術となっているのです。

『推し、燃ゆ』

著者 宇佐見りん 発行 河出書房新社



石橋宗樹

現代において「推し」や「推し活」という言葉は、人生を彩るポジティブな趣味として日常に

溢れています。しかし、本作で描かれる「推し」は、そのような生易しい娯楽ではありません。主人公のあかりにとって、それは趣味を超え、生きるための「生命線」そのものなのです。

あかりは、いわゆる「普通」のことがうまくできません。バイト先ではミスを連発し、家族との対話もままならず、自分の身体の重さすら持て余して社会の枠組みからはみ出し続けています。病院で診断名がつくほどの根源的な生きづらさを抱える彼女が、唯一、生身の人間として機能できる瞬間、それが、アイドル・上野真幸を「推す」ときだけでした。彼のブログを読み解き、CDを積み、彼を解釈し続けることだけが、彼女

の混沌とした世界に唯一の秩序をもたらしていたのです。

物語は、その「生命線」であるはずの推しが、ファンを殴って炎上するという衝撃的な場面から幕を開けます。絶対的な存在が世間から糾弾され、輝きを失っていく。そのとき、推しに寄生するように命を預けていたあかりの日常は、足元から崩れ去っていきま

す。本作は単なるアイドルの物語ではなく、何かに依存しなければ自分の輪郭を保てない、現代を生きる私たちの切実な肖像画といえるでしょう。

特筆すべきは、著者の圧倒的な筆力と「言葉の重み」です。論理を超え、感覚器官に直接訴えかけてくる文章は、あかりが感じる倦怠感や、炎上の際の絶望を、痛いほどの解像度で描き出します。感情語に頼らず、身体感覚を通して絶望を表現する手腕は、読み手の心を激しく揺さぶります。客観的に見れば、あかりの生き方は破滅的かもしれませんが、採算度外視で他者に命を燃やすその姿は、合理性や生産性が至上とされる現代社会において、不器用な私たちが生き延びるための、ある種の「祈り」のようにも見えます。

読み終えた後に残るのは、爽快感ではなく、重くざらりとした感触です。しかし、そのざらつきこそが、私たちが現実と向き合うための確かな手触りなのだと、本作は突

きつけてくるのです。

『SDGsの考え方と取り組みが
これ1冊でしっかりわかる教科書』
著者バウンド 発行技術評論社



小津優直

皆さんは「SDGs」について深く考えた事がありますか。私自身、この本を手に取り読んでみるまで「SDGs」について

の興味関心はあまりありませんでした。この本は「SDGs」について事前知識がなくても理解を深める事ができる本です。まず「SDGs」とは「Sustainable Development Goals(持続可能な開発目標)」の略称です、国連に加盟している全ての国が達成を目指す二〇三〇年までの国際目標の事です。

今回は、なぜ「SDGs」に取り組まなければならないのかについて紹介します。世界は貧困、経済格差、気候変動、人種差別、性差別などさまざまな問題に直面しています。日本でも「過去に経験した事がない」ような集中豪雨が発生しています。このような問題はさまざまな所で起きていますが、問題の原因を突き詰めると、私たち人間の行為に結びついています。差別する心を持つのは人間ですし、利益のために環境を破壊して

いなければ、地球温暖化も起きていないのです。自分はそのような事はしていない、関係ないという人でもこうした問題には無関心ではいられない状況になっています。

二〇一九年にアマゾンの熱帯雨林で発生した過去最大規模の火災は、環境の保護より経済成長を優先した政策にあるといわれています。アマゾンの熱帯雨林は大量の二酸化炭素を吸収して酸素を吐き出す「地球の肺」と呼ばれており、この火災は地球全体に影響を与えかねないものです。たとえ、地球の裏側で起こった事でも全ての人が地球の住人であると考えれば、他人事にはできません。

「自分さえ良ければいい」とは考えず、私たち人間と地球の環境を守るために何ができるのか、この本を読んで見つけませんか。

『図解でわかる』

14歳から知る「ごみゼロ社会」

著者インフォビジュアル研究所
発行太田出版

川田功大

私たちの生活の中で、当たり前のように使っている「ゴミ」、特にプラスチックごみの問題を通して、これからの社会について考えさせてくれる一冊です。コンビニの袋やペットボトル、食品トレーなど、身の回りを見渡す



とプラスチック製品はあふれています。しかし、それらが捨てられた後、どうなっているのかを詳しく知る機会はありません。

分」を図解で分かりやすく教えてくれます。プラスチックごみが焼却や埋め立てだけでなく、川や海へ流れ出してしまう現状が紹介されています。海に流れ着いたプラごみは、細かく砕けてマイクロプラスチックとなり、魚や海鳥がえさと間違えて食べてしまうこともあります。そして、その影響は最終的に私たち人間の食や健康にも関わってくるという点が、図やイラストを通して具体的に示されています。

また、「リサイクルすれば大丈夫」と思いがちなプラスチック問題についても、現実を分かりやすく伝えてくれます。すべてのプラスチックがリサイクルできるわけではなく、多くが燃やされたり、海外に輸出されたりしている現状を知ること、ゴミ問題をより深く考えるきっかけになります。

一方で、問題点を伝えるだけで終わってしまいます。マイボトルを使う、必要以上に物を買わないなど、私たちが今日からできる小さな行動も紹介されています。「一人の力は小さくても、知って行動することが未来を変

える」というメッセージは、環境問題に初めて向き合う人にも勇気を与えてくれます。プラスチックごみは、私たちの便利な生活と深く結びついています。この本を読むことで、その便利さの裏にある問題に気づき、ゴミゼロ社会への第一歩を踏み出すことができますでしょう。

『サッカードリブル解剖図鑑』

著者 三苦薫 発行 エクスナレッジ



神林優太

『サッカードリブル解剖図鑑』は、ドリブルという複雑な技術を「感覚頼りのスキル」から「理解して再現できる技術」へと変えてくれる、実践的かつ理論的な図鑑です。サッカーにおいてドリブルは、ボール扱いの巧さだけではなく、重心の移動、ステップワーク、身体の向き、視線の使い方、相手ディフェンスの誘導など、多くの要素が連動することで初めて効果を発揮します。この本はそれらを、分解し、豊富なイラストとともに丁寧に解説することで、読者が「なぜその動きが効くのか」を理解できる構成になっています。

特徴的なのは、フライングの入り方や緩急

の作り方といった華やかな技術だけでなく、それらを成功へ導くための「準備動作」や「細かな重心の置き方」に大きく踏み込んでいる点です。例えば、相手の足が出る瞬間を見極める視線の使い方、相手の重心をずらすためのわずかな身体のひねり、縦への突破を匂わせてから横へ切る際のステップの向きなど、普段の練習では意識しきれない要素が具体的に示されています。図解は動作の一瞬を切り取っており、ボールと足の接触位置、上半身の角度、加速のタイミングなどが視覚的に理解しやすく、読んだその日から実践できる内容が満載です。

さらに、ドリブルに苦手意識をもつ選手が改善しやすいよう、段階的な練習方法も収録されています。基礎のボールタッチ練習から、相手を想定した実戦的メニューまで、目的とレベルに合わせて取り組める構成となっており、ジュニア選手から競技者、さらには指導者にとっても大いに役立ちます。「スピードに乗れない」「相手に読まれてしまう」「抜き切る瞬間で失敗する」など、よくある悩みに対して、原因の分析と改善ポイントが示されている点も心強い魅力です。

ドリブルは単なる「個の技術」ではなく、チームの攻撃リズムを変え、試合の流れを動かす力を持つ重要なスキルです。この本は、そのスキルを理論的に理解し、自分のプレースタイルに応じて使いこなすための道筋を示

してくれれます。ドリブルの奥深さと面白さを再発見できる、選手にも指導者にも価値ある一冊です。私はこの本を読み、自分の技術をより高めていこうと思いました。

『大阪ことばの謎』

著者 金水敏 発行 SBクリエイティブ



小池麻央

私は、個人的な旅行と修学旅行の二年連続で行った大阪をテーマにしたいと思っていたところ、

この本が目にとまりました。皆さんは日常の中で、関西人ではないのに『なんでやねん』『知らんけど』などを使うことがありませんか？なぜこのような大阪弁が国民的流行語に選ばれたり、私達はい使ってしまったのでしょうか？

この本は大阪弁が未だに強い存在感を保ち続けている謎に迫るものです。

筆者はまず、大阪人のことばがオノマトペや繰り返し表現、『人』の多用でリズムを作り出している点に注目しています。本の中では関西出身の作家さんや落語の例が挙げられていますが、確かに詳細なオノマトペが多用されています。それにより、より生

生き生きと臨場感を持って表現されているのです。

ではなぜ多用されているのでしょうか？それは相手にポジティブに関わっていかうとする一種のサービスピース精神が関係しています。大阪人は「相手と一体になりたい。共感したい。」という欲求が高い傾向にあるようです。また、具体的な臨場感を会話に持たせる事が聞き手へのサービスピースだと考えたり正しさよりも楽しい会話を大事にしたりするそうです。こういったコミュニケーションスタイルが謎を解くヒントになります。さらに、本書では大阪弁がいつどこで生まれたのかであったり、落語家の活躍、漫才ブームが大阪弁を確立した流れが解説されています。

また、大阪弁のリズムやメロディを楽譜を用いて表現したり、アクセントへの深い考察もされたりしています。著者は本書の中で古典文学やアニメ・漫画・CMソング・ネットの書き込みから「エー」グランプリにまで精通していて、誰にでもわかりやすく、クスクスと笑える部分もあります。皆さんもこの本を読んで大阪弁の



(通天閣のビリケンさん・大阪)

謎と魅力を存分に味わい、この多彩な世界を楽しんでみませんか。知らんけど。

『新・日本の歴史 第二巻

貴族と平安仏教 平安時代』

監修 山折哲雄 著者 大角修
発行 小峰書店



今野結友

皆さんは京都文化がお好きですか？京都は皆さんご存知のとおり、とても歴史の深い魅力あるところですよ。

ところで清水寺は寺社縁起(寺院や神社が生まれた由来)によると坂上田村麻呂が病気の妻のために建てた寺だということをご存知でしたか？清水寺は千手観音(千本の手でどんな人でも救う)を祀る観音菩薩の霊場で、平安時代に多くの人が参拝するようになった寺です。坂上田村麻呂は平安時代初期の武將で、桓武天皇の命を受けて東北地方の「蝦夷(えみし)」を平定し、日本史上初の征夷大將軍に任じられた人物です。

田村麻呂は病気の妻に鹿の肉を食べさせるため東山(今も清水寺がある山)に狩獵に行き、庵で賢心という僧に出会いました。賢心によると川の上流に清らかな泉があると、いう夢を見たので東山に分け入っていくと、泉のほとりの庵に行叡居士(きょういけいこじ)

という仙人のような僧がいたそうです。行叡居士は数百年も生きており、「自分は東国に修行していくから、かわって庵にすめ」と賢心に告げ、姿を消しました。賢心は、行叡居士を千手観音の化身だと感じて、その像を刻んで庵に祀り像を守って住んでいました。そこへ坂上田村麻呂がやってきたそうです。田村麻呂は泉の水を汲み、都の館に帰って病床の妻にこのことを話し、妻は「聞けばみな、権化(仏のあらわれ)のお話です。それなのにわたしは、病をなおしたために狩獵の殺生を頼みました。どうか、わたしの屋敷を売って、その地にほどこし、罪を懺悔したいと思います」と言いました。それで坂上田村麻呂は賢心と心を合わせて寺院を建てようとしたのですが、山は険しく、平地が少しもありませんでした。ところが夜中に大きな物音がして、それは崖を崩し、谷を埋めているように聞こえました。朝、そこを見ると、寺の境内を仕切ったような平らかな土地ができていました。それは鹿たちがしたこと、建てられた寺は音羽山清水寺と呼ばれました。境内にある音羽の滝の水は「黄金水」「延命水」と呼ばれ、一口飲むと願い事が叶うと言われている、今でも有名な観光地です。

この本にはこのような清水寺に関することだけでなく、京都にある神社・仏教についてなど京都に関すること以外にも、様々な

平安時代を中心とした文化について書かれています。とても興味深い話題ばかりなので、ぜひこの本を手にとって、私たちが知らなかったような新たな日本の文化に触れてみてはいかがでしょうか？

『マンガ版ちよとだけ・こつそり』

素早く「言い返す」技術

著者 ちよきゆう 発行 三笠書房



人から色々言われた際に、上手く言い返せない人のために、『ちよとだけ反撃』をして、自分も相手も

良好な関係を築けるようになるための本です。著者・ちよきゆうさんの実体験、人間心理をもとにこの本の話は進んでいきます。あなたは口喧嘩をした際に、何も言い返せなかったと言う経験をしたことが少なからずあると思います。ではなぜ口喧嘩で言い返せなかったのでしょうか？言葉が出てこなかった、単純に相手の勢いに押し負けてしまった、などいろいろな理由があります。口喧嘩とは、ただ正しいことを言うだけでは相手に勝つことができません。ではどうしたらガツガツ言ってくる人に対して口げんか

勝てるのか。それはただ単に「相手より多く喋る」だけです。著者は口喧嘩のことを「自分の口数が多いこと、そして相手の口数を減らせるゲーム」と表現しています。口数は国家に例えるなら武器の差なのです。どんなに強い国でも武器がなければ小さな武器のある国には勝てません。どんなに相手にガツガツ言われていても、逆に自分が相手にガツガツ言ったら劣勢から優勢に形勢逆転します。このように口数は口喧嘩を制することにとっても大事なのです。とある心理学者が「砂漠で生き残るのには何が一番大切か？」と言う質問を投げかけてそれについて五人程度のグループで議論させました。すると「水」や「食料」さらに「道具」などいろいろな意見ががりました。しかし討論をすれば、たいいてい意見はひとつにまとまります。この時最終的に、どんな人の意見こそが、最も通りやすかったと思いますか？実はその答えはシンプル。単に『最も多く話していた人の意見』だったのです。実際その内容は、ほとんどの場合、知識も根拠もありませんでした。小難しい理屈など必要なく、「発言量の多さ」意見の先導者」と言う結果になりました。

この本を読めばあなたも、今まで口喧嘩で言い返せず、後悔をした相手にも対等に言い返せるようになります。またここに挙げたものは本文の一部に過ぎず、まだまだ

人生にとって身に付く言い返し方が載っているのでぜひ読んでみてください。

『図説 成田の歴史』

発行 成田市



友杉早絵 この本は、成田市の成り立ちから現代に至るまでの歩みを豊富な写真、地図、図版資料と共に紹介

しています。私は放送部として成田市からの依頼やボランティア活動に携わってきました。活動を重ねるうちに、成田がどのような歴史や文化を積み重ねてきたのかを知りたいと思うようになりこの本を選びました。この本は八章に分かれており、今回はその中の「くらしと文化」をご紹介します。

世界中の人々が行き交う空の玄関口、成田国際空港は現代的な顔を持ち、門前町として栄え、初詣客で賑わう成田山新勝寺は歴史ある落ち着いた雰囲気を出す成田。そんな成田の夏は祭り一色になります。そう、成田祇園祭です。成田祇園祭は、成田山新勝寺の奥之院に安置されている大日如来の祭礼として約三百年前から行われてきました。成田山の御輿一台と各町内か

ら十台の山車による仲町の坂上がりは土地の起伏が多い成田ならではの引き回しです。

皆さんは引き回しを盛り上げのお囃子の音色が二系統なことを知っていますか？テンポが良く明るく華やかな音色の江戸ばやし系。太鼓の響きに深みがあり、落ち着いたりリズムの中に力強さを感じる佐原ばやし系の音色。同じ祭りの中で二つのお囃子が混在しているのは全国的に珍しいです。だからこそ成田祇園祭はより奥深く、歩くたびに新しい表情を見せ、人々を魅了しています。

また、成田の伝統的な祭りとして、阿波おどり、山鹿灯籠踊り、仙台すずめ踊りなど、全国各地の祭りや踊り、獅子舞が一堂に会する成田伝統芸能まつりや日本屈指の和太鼓の祭典である成田太鼓祭があります。特に成田伝統芸能まつりで披露される「成田のおどり花見」は初めて聞いた言葉でした。この行事は、毎年四月三日に、旧成田町を形成していた幸町、花崎町、田町、東町、本町、仲町、上町の七か町の女人講によつて継承されています。年番町内の女性たちが、三ノ宮殖生神社を出発点に十六の神仏



(團護台三和会の山車)

をまわり、それぞれのたえ歌をうたい、弥勒踊りという踊りを奉納します。歌詞の最後に



(花崎町の山車)

「あんば大杉大明神、悪魔を祓つてヨイヤサ」とありますが、これは江戸時代に疱瘡除けの神として流行した茨城県稲敷郡桜川村の大杉神社信仰もミックスしていることを表しているそうです。

成田祇園祭も成田おどり花見も成田の伝統を軸にしながら、他地域の文化を受け入れて育まれてきました。さまざまな文化が重なり合い、その響きの中から成田だけの美しい風景が生まれています。他にも原始古代から近世までの成田を日本の歴史と絡めて書かれており歴史好きにはたまらない一冊です。成田の歴史や文化に触れる一歩としてぜひ読んでみてください。

『1冊で分かる！ESG/SDGs入門』

著者：大森充 発行：中央公論新社

中村慶吾

今、世界中で二酸化炭素の増加に伴い地球の平均気温の増加、海面上昇などの問題に直面しています。皆さんも一度は聞いた事があるかもしれませんが、このような環境問題を解決するために二〇一五年に国



連サミットで「SDGs」(持続可能な開発目標)が採択されました。皆さんが「SDGs」とは何かと聞かれたいらどのように答えるでしょうか。おそらく十七の目標があり、達成したら地球がより良くなると答える人が大半だと思います。では、目標を達成するためにはどうしたらよいのでしょうか。

例えば、私たちがスーパーにいつて買い物をする際、ある一定の時間あるいは常時店内の電気が暗い状況になっているのに遭遇したことがあると思います。これは「SDGs」第七「エネルギーをみんなに」としてクリーンに」という目標に対応しています。また、スーパーのレジ袋を使わずに家から持ってきたエコバッグを使う人は無意識に「SDGs」第十二「作る責任、使う責任」と第十四「海の豊かさを守ろう」に貢献しています。このように私たちは日常生活の中で「SDGs」と深くかかわっているのです。

また、多くの人が夏に日焼け止めを塗ると思います。その時に花王の製品を使った事があるのではないのでしょうか。花王は、消費者が日常的に環境保護を行えるように商品コンパクト化や濃縮化、プラスチック資源のリサイクルを促進しています。社会面で

は次世代の社会起業家の育成、地域の人へのコンサートを行なっております。花王の取り組みはさまざまな企業が行なっている「ESG」政策の一つで、全ての命が調和する心豊かな未来を目指しています。

「SDGs」と「ESG」は私たちの生活に関係するものが多く実存しています。ここで紹介したものの他にも多くの社会的取り組みが行われています。また、自分自身の生活に気を配り、環境保護を実行していく事が大切だと思いました。

『CHIBA 千葉チ〜バ』

監修 小和田哲男 山本博文

発行 宝島社(洋泉社)



中村優斗

我らが成田高校もある千葉県には多くの歴史が残っている。千葉県内のさまざまな歴史や、知られていないような意外な情報がまとめられているのだが、その中でも自分が注目したのが「成田国際空港完成まで」の出来事についてである。

現成田国際空港(旧新東京国際空港)の設立前、そこには戦後、入植した農民たちが開拓した御料牧場があった。政府が成田

に空港を建設することになった時、その農民たちが反対運動を起こした。それもその筈、政府は農民たちに説明せずに建設を決め、農民たちの立ち退きを余儀無くさせられたからである。そこに、新左翼と呼ばれる過激派が加わりゲリラ事件が続いていった。結果として、昭和四十四年の閣議会議によって牧場は栃木県に移転することとなったのである。今現在日本の玄関として、多くの外国人を出迎えている成田国際空港は、一部の人にとっては悲しみの地でもあるのであった。

また、成田国際空港の隣接地、芝山町にある『航空科学博物館』では過去に活躍していた飛行機のレプリカやその部品が展示されており、見た人の子ども心をくすぐってくれる。また、フライト・シミュレーターを使った飛行体験や成田国際空港に離着陸する飛行機を観察し、その音を楽しむことのできる体験型の博物館ともいえるだろう。皆さんも一度行つて、航空の歴史を感じてほしいと思う。

この本はいろいろな千葉県の情報が百六十個もまとめられていて、少し見ただけでも楽しめる。読めばもっと千葉県が好きになれる、そんな本だ。



『不動明王』

著者 渡辺照宏 発行 吉川弘文館

中本竣介



成田山新勝寺は不動明王信仰の総本山です。不動明王は、仏教、特に密教において最も重要なかつ有名な位

る尊格(仏教における仏様や神々などの位の一つです。サンスクリット語では「アチャラ・ナータ」と呼ばれ、「動かざる守護者」を意味します。大日如來の化身(教令輪身)とされ、慈悲深い如來が優しく説いても従わない頑なな衆生を、恐ろしい姿をもつて無理やりにも救済するために現れた姿です。その最大の特徴は、一般的な仏像の穏やかな表情とは対照的な憤怒相にあります。逆立った髪、鋭い牙、天地眼などは、煩惱を断ち切り、悪を威圧する強い意志を表しています。これらのことから私は不動明王に悪から絶対守るというという強さと優しさを感じました。



(成田山新勝寺・石摺不動尊)

また、右手に持つ三鈷剣は、人々の迷いや煩惱を切り裂く知恵の剣です。左手の絹索という縄は、悪を縛り上げ、あるいは迷える人々を救い上げるための道具です。背負っている



(成田山新勝寺)

激しい炎は迦楼羅炎と呼ばれ、一切の罪障を焼き尽くす慈悲の炎を意味します。どうしりと座る磐石は、何事にも動じない揺るぎない決意の象徴です。その徹底した姿勢は、現代社会で時に見失いがちな、厳しさという名の愛情そのものだと感じました。

信仰の面では、家内安全、商売繁盛、病氣平癒、さらには厄除けや必勝祈願など、現世利益をもたらす非常に力強い仏として知られています。特に日本では平安時代に空海(弘法大師)が密教を伝えて以来、身近な守護神として広く浸透しました。お不動さんの愛称で親しまれ、成田山新勝寺や高幡不動尊、目黒不動尊など、全国各地に有名な霊場が存在します。

修験道においても最高峰の守護神とされ、滝行や火渡りの儀式など、厳しい修行の場でも深く信仰されています。また、ご利益を得る言葉を唱えることで、災厄を払い、心の

平穏を得られると信じられています。

不動明王は、一見すると恐ろしい姿をしています。その本質は「迷える者を一人も取りこぼさない」という極めて深い慈悲の心にあります。厳しさの中に温かさを秘めたその存在は、現代においても多くの人々の心の支えとなっているように感じました。

『「原子力」のことが

一冊でまるごとわかる』

著者 齋藤勝裕 発行 ベレ出版

藤田慶吾



原子の基礎知識から原子力発電、放射線、そして核兵器に至るまで、原子力に関する内容を幅広く

く解説した入門書である。私たちはニュースや社会の授業で「原子力」や「放射線」という言葉を頻繁に耳にするが、その仕組みを具体的に説明できる人は多くないと思う。本書は専門的な内容を扱いながらも、難解な数式をほとんど使わず、順を追って説明しているため、高校生でも理解しやすい構成になっている。

まず印象に残ったのは、原子の構造と核分裂の説明である。陽子や中性子、電子と

いった基本的な粒子の関係から始まり、なぜ原子核が分裂すると莫大なエネルギーが放出されるのか丁寧に説明されていた。教科書では簡潔に書かれている部分も、本書では具体的なイメージを伴って理解することができ、科学の知識が単なる暗記ではなく「仕組み」としてつながったと感じた。また、半減期の概念についても説明されており、放射性物質が時間の経過とともにどのような減少していくのかを理解することができた。

さらに、原子力発電の仕組みについても詳しく解説されていた。核分裂で生じた熱が水を沸騰させ、蒸気でタービンを回して電気を生み出すという流れを知り、普段何気なく使っている電気がどのように作られているのかを具体的にイメージできるようになった。エネルギー問題との関係にも触れられており、原子力が社会の中でどのような役割を持っているのかを考えるきっかけになった。

また、核兵器の原理についても扱われており、原爆や水素爆弾の仕組みを理解することができた。加えて、ニトログリセリンやトリニトロトルエンといった爆薬についても説明されており、化学反応による爆発と核反応による爆発の違いが分かりやすかった。さらに、世界各地で起きた被曝事故の事例も紹介されており、原子力技術が持つ危険性や、

その扱いの難しさについても考えさせられた。この本を読んで、原子力は単に「怖いもの」でも「便利なもの」でもなく、正しく理解し、慎重に扱う必要がある技術だと感じた。仕組みを知ることによってユースの内容をより深く理解できるようになり、自分なりに意見を持つ大切さにも気付かされた。理科が得意な人だけでなく、社会問題やエネルギー問題に関心のある高校生にもぜひ読んでほしい一冊である。

『そして誰もいなくなった』

著者 アガサ・クリスティー

訳者 青木久恵 発行 早川書房



丸山富誓

突然だが、君は「ミステリ小説」は好きか。

「大好きだ」と

思ったそのき

みも、「あんま

読んだことないんだよな」と思ったそのきみも、もう少し私の文章を読んでいつて欲しい。

『そして誰もいなくなった』というミステリ小説がある。このタイトル、どこかで聞いたような気がする人も多いのではないか。それもそのはず、これは「ミステリの女王」と呼ば

れる女性作家、アガサ・クリスティーの最も有名な代表作の一つである。かの有名な見た目は子供、頭脳は大人のサスペンス漫画に出てくる、でかい鼻をした博士の名前の元ネタもこの人である、と言えは少しは親近感が湧くだろうか。

「名作ミステリ小説」は世の中にごまんとあるが、中でも、アガサ・クリスティーの『そして誰もいなくなった』を読まずして名作ミステリについては語れまい。

この物語の舞台は、海に囲まれた孤島の屋敷。互いに面識のない十人が招かれ、ある日を境に、「十人のちいさな兵隊さん」という童謡の歌詞通りに、ある者は毒物で死に、ある者は転落死、またある者は銃殺など次々と人が死んでいく。また、嵐によって来るはずだった船は来ず、電話や電信などの外部との連絡手段もなく、もちろん絶海の



（「十人のちいさな兵隊さん」の和訳歌詞）

孤島には逃げ場らしい逃げ場もない。誰が犯人なのか分からないまま、登場人物たちは疑心暗鬼へ陥つていく。読者である私たちも、その不安や恐怖と一緒に感じながらページをめくることがになる。

この作品のすごいと



（作中の島はこんな海岸に囲まれている？・千葉県犬吠崎）

ころは、「犯人は誰だ」という単なる犯人当て小説では終わらない点だと思ふ。登場人物たちはそれぞれ過去に罪を抱えており、その罪が少しずつ明かされていく。その過去の罪がこの小説を単なるミステリ小説ではなく、彼らの疑心暗鬼に拍車をかける、優秀な舞台装置としてこの小説を、傑作ミステリたらしめている。

また、読み進めるうちに何度も予想が外れるのも、この作品の面白さである。怪しいと思った人物が次の瞬間には犠牲者になり、二転三転する状況に、完全解消されることなく重なる謎。それら全てに振り回さながら読者は推理を立て直さなければならぬ。そして、最後の真相が明らかになったときには、「うわあー！」と声に出したくなるほど驚かされる。現に自分は声が出た、ここまできれいに伏線が回収される物語は、なかなかない。

ミステリ小説の魅力は、謎解きの楽しさと同時に、人間について深く考えさせてくれるところにある。『そして誰もいなくなった』は、

その魅力を一冊で教えてくれる作品だ。まだ読んだことがない人は、ぜひ手に取ってほしい。後悔はさせない。ページをめくるたびに、ミステリという世界の奥深さに引き込まれていくはず。

『ピーター・パン』

△著者△J・M・バリ △訳者△厨川圭子
△発行△岩波書店



三浦波奈
「子供の頃に読んだ物語の原作を、高校生になった今の自分が読んだら、どのように感じるのか」という興味

を持ったことはありませんか？

私が子供の頃に読んだピーター・パンのお話は主人公のピーターが自由に単純で鈍感、気まぐれで正義ではないけれどもおもしろくて子供達の英雄的存在。好きな時に自由に空を飛んで行きたい場所へ行ける。好きなことだけをしたいられる楽しい世界「ネバーランド」。冒険の楽しさと自由を伝えてくれるファンタジーでした。

しかし、原作のピーターはそれだけではありません。善悪の区別がついておらず、自

己中心的。物語の中では残酷な場面や差別、大人になることの切なさも描かれています。そして、乳母車から落ちて親に気づかれなかつた子供がネバーランドへ連れて来られてしまう。子供を失った親の気持ちも描かれており、子供の目線だけでなく、親(大人)の立場に立つて考えさせられる場面もあります。また、意外なことに絶対悪だと思っていたフック船長に対しても生い立ちや心情を理解してみたいと思ってしまう。そして海賊による先住民であるインディアン達への行いも子供の頃には知らされずに済んでいた現実の厳しさのひとつです。

元々、舞台用に描かれたお話なので、少しの読みにくさは否めず、飽き性の人には正直お勧めできません(原作のピーターは飽き性です)。

空を自由に飛ぶ鳥を見て「私も鳥になって自由に空を飛び回ってみたい。」そう思ったことがあるのは私だけではないはずです。ピーターは純真無垢な子供そのものです。あなたの心の中にもピーターがいるかもしれません。このお話の着眼点は読者次第です。意外な場面を考察することになると思います。原作を読むことによって、子供の頃には感じることのなかつた高校生ならではの別の魅力を感じ、違う楽しみ方が出来るのではないのでしょうか。ぜひ、ファンタジーを楽しんでください。

『仏像なぜなぜ事典』

△編者△大法輪閣編集部 △発行△大法輪閣



吉野由剛
仏像とは何でしょうか。「仏像」と聞いて、まず思い浮かぶのは、奈良の大仏や阿修羅像、金剛力士像などではないでしょうか。もちろん、これらも仏像なのですが、この本を通して、仏像への理解をさらに深めてみてほしいです。

およそ二千五百年前、現在のインドでお釈迦さまが生まれました。お釈迦さまは六年にわたる修行のすえ、この世の本当のあり方や物の見方がわかり、「仏陀」となられました。そして、さまざまな方法で人々に教えを説きました。お釈迦さまが亡くなった後、そのあまりの偉大さと尊さから、「人の姿で表すことはできない」と考えられるようになります。そのため、悟りを開いた場所の台や菩提樹、あるいは車輪の形などによって、仏さまを表していきまし



(京都・鞍馬寺)

(東京国立博物館特別企画展・不空羼索観音菩薩立像)



た。ところが、紀元一〜二世紀ごろになると、ギリシヤ文化の影響を受け、仏さまを人の姿で表すようになります。これが、現在私たちが拝んでいる仏像のはじまりです。ここでは、この本に書かれている「なぜ？」の一つを紹介します。

まずは七福神についてです。七福神とは、恵比寿・大黒天・福祿寿・毘沙門天・布袋和尚・寿老人・弁財天で、よく宝船に乗っている七柱の神様です。では、なぜ七福神は宝船に乗っているのでしょうか。日本では、「お正月の二日の夜に良い初夢を見ると、その年は幸福になれる」と信じられてきました。室町時代のころ、人々は稲束や米俵をたくさん積んだ船の絵を描き、お正月二日の夜にそれを枕の下に入れて、「どうか良い初夢を見られますように」と願いながら眠ったそうです。やがてその船は、打ち出の小槌や隠れみのなど、財産や幸運をもたらす空想の宝物を積んだ「宝船」と変わっていききました。そしてさらに大きな幸福を願い、七福神をその船に乗せ、順風に帆をふくらませて自分のもとへ来てくれるよう祈ったのです。このように、人々によつて七福神のイメージが

変化したようです。

この本は仏像をあまり知らない人でも楽しく仏像を見ることのできるおすすめの一冊です。

『「推し」で心はみたされる?』

著者 熊代亨 発行 大和書房



近藤十和子

あなたは「推し」についてどう思いますか? 今やアイドル、キャラクター、スポーツ選手など、多くの人たちが誰かしら何かの「推し」を持つようになる時代です。しかし、しばしば「推し」に盲目的になっている人が見受けられます。それは本当に心は満たされたと言えるのでしょうか?

この本は「推し」を応援することが私たちの心にどんな影響を与えているのかを考える本です。「推し」があることで生まれる楽しさや前向きな気持ちの一方で、盲目的になつてしまうことの注意点や、心を満たすための「推し」との上手な付き合い方を考えさせてくれる一冊です。

特に印象的な点は、「推し」をうまく利用できる人とそうでない人で人生の難易度や

幸福感が変わってくるという点です。これは承認欲求と少し似ていて、承認欲求は、褒められたい、認められたいという気持ちの問題であり、モチベーション源でもあり、だからこそ才能を伸ばしていく触媒や、この役割も果たします。「推し」や「推し活」も同じで、例を挙げると、バンドアニメがヒットするとギターが売れるようになり、また大谷翔平選手や山本由伸選手に憧れて、自分も野球選手になりたいと思う人もいます。これにより、気持ちが満たされるだけでなく活動や技能や才能、ひいては、将来や可能性をも左右するということです。

「推し」は気持ちを満たしてくれるのと同じに、人生を左右するほどの大きな力を持ちます。「推し」との距離感が大事だとひしひし感じました。

この本は「推し」という身近なテーマを通して、心の満たされ方について考えさせてくれる一冊です。

「推し」がいることの楽しさや前向きな力だけでなく、気持ちの向け方によっては苦しくなることも触れており、バランスよく考えられる点が魅力



(手作り推し団扇)

です。「推し」がいる人はもちろん、「推し」がない人にも新しい気づきを与えてくれるような一冊になっています。



【編集後記】

図書部 技術家庭科主任 吉田純子

今年はガウディ没後百年に当たるそうです。お酒のCMで観たセットが実在の建造物であると後に知り、度肝を抜かれました。こんな子どもが粘土でこねくり回したような建物を、大人が真面目に巨大建造物として百年もかけて建てているんだ……、大人もやるじゃん、スペインすげえつて、中学生の私は思いました。そんなワケで初めての海外旅行先にはバルセロナを入れました。残念ながらグエル公園は工事中で一番好きなトカゲを見ることはできませんでしたが、サグラダファミリアには登ることができました。狭い塔の内壁に螺旋状に張り付いた手すりも無い階段。ここ登っていいんだ？と大興奮。てっぺんまでは行けませんでしたが、中腹で外に出られ、十字の飾りのところで地中海の風に吹かれてました。それ以降塔とみると登らずにはいられません。

いい学校・いい会社に入れば安心、という時代ではなくなりました。お金があれば大丈夫？とも限りません。子どもができた

とき、この子になにを望めばいいのだろうと考えました。幸不幸に関わらず挫けず不幸も受け入れる(ある意味楽しむ)事ができる人になって欲しいと思います。興味がある、やつていて楽しいことは損得を考えすぎず、やつてみたいと思うのです。塔を見たら登りましょう。



(サグラダファミリア・バルセロナ)



▼取材協力

・国際子ども図書館

▼令和六(二〇二五)年度末蔵書冊数

図書館蔵書冊数 五五,三三九冊

▼学校図書館の発行物

『Bibliothek』

新着図書の中から、お薦めの図書を紹介。

◆毎週発行

(学校内掲示及び学校HP掲載)

『READ』

教職員のおススメの本を紹介。

◆毎月発行

(学校内掲示及び学校HP掲載)

『図書館だより』

テーマに沿って図書委員が取材、編集。

◆毎年九月頃発行

(生徒配布及び学校HP掲載)

▼図書委員会 役員

図書委員長……高三H 吉野由剛

副委員長……高二H 五十嵐友映

副委員長……高一G 大塚菜々美

展示班

班長……高三C 石橋宗樹

副班長……高二D 泉谷静香

副班長……高一G 萩尾翼

蔵書点検班

班長……高三A 小津優直

副班長……高二H 太田里緒

副班長……高一H 田中ちひろ

図書館だより班

班長……高三G 中村優斗

副班長……高二G 近藤十和子

副班長……高一I 石井健琉



令和八年九月吉日・第一〇三号
成田高等学校図書委員会発行

**Narita High School
& Junior High School**

Library